

# 特集・子どもの文学この二年

## ★ 総論

きみたちはそしてぼくたちは  
このフェイク多き世の中をどう  
捉えどう描きどう生きるのか

細谷 建治

昨年発行された『日本児童文学』9・10月号の特集「なぜ『君たちはどう生きるか』なのか」を読んで、おどろいた。具体的には、増井真琴「秘された恥部——小川未明の転向をめぐって」を読んだときである。

増井は、小川未明の〈黒歴史〉として、その転向の問題をとりあげている。

〈小川未明にも、そのような人に触れて欲しくない過去が

あった。社会主義から国家主義へ、国家主義から戦後リベラリズムへ、次々と思想を変転させていった、転向者としての過去である。そしてこの過去は、「童話の神様」と称えられた、偉大な文豪の秘すべき恥部として、長年の間、隠蔽されてきた。〉

ぼくがおどろいたのは、未明が次から次へと思想の変転をくりかえしたという事実ではない。そのあとの〈秘すべき恥部として、長年の間、隠蔽されてきた〉という、増井の捉え方に対してである。

ぼくにとって、未明の転向は、周知の事実であった。決して、長い間隠蔽されてきた〈秘すべき恥部〉などというものではない。

例えば、今から六十年以上前に、菅忠道は『日本の児童文学』（大月書店 一九五六年四月）の中で、戦時中の未明について〈その目に写ったのは、日本の民主的・芸術的児童文学の進歩の象徴であった小川未明が、戦争を肯定し戦争の悲壮美を童話に描いていたことである。〉と、その思